

「あなたの思い出売ります」

— 2 稿 —

2026/09/06

山極 瞭一朗

〈人物表〉

麻木 蓮一郎 あさぎ れんいちろう

(27)
会社員

笠原 雫 かさはら しずく

(24)
蓮一郎の元恋人

古淵 辰之助 こがち たつのすけ

(64)
古物商・「メモリユース」店主

水族館・スタジアム（タ）

イルカショーの真っ只中。

大勢の客がリズムに乗って手を叩きながらショーを楽しんでいる。

その中に、麻木蓮一郎（27）の姿。イルカには目もくれず、隣にいる恋人の笠原雫（24）を凝視している。

蓮一郎「今、なんて言った？」

彼の膝にはペンギンのぬいぐるみ。雫のカバンにも色違いのペンギンのぬいぐるみがある。

雫、イルカを見ながら、

雫「別れたいって」

蓮一郎「今言う？」

雫「今しかないって」

イルカがジャンプ。水しぶきが客席に飛び、観客たちは悲鳴に似た歓喜の声。

雫「これ以上楽しくなったら、言えなくなりそうで」

蓮一郎「楽しくていいじゃん。俺は楽しいよ、雫って」

雫「もう違うの、違うって思っちゃった」

蓮一郎「4年だよ、もう4年一緒にいるじゃん」

雫、蓮一郎を見つめて、

雫「それって、情だよな」

蓮一郎「え？」

雫「純粋な好きって気持ちじゃなくて、4年も付き合ったから、手放したくないって、そういう……」

蓮一郎「いやいや……」

イルカショーはクライマックス。

イルカたちは立て続けにジャンプ。

蓮一郎「決定的なことあった？ 俺……」

雫、ため息をつく。

雫「昨日今日で決めたことじゃないの」

蓮一郎「雫……」

雫「ごめん」

蓮一郎「……俺は嫌だよ」

イルカショーはフィニッシュ。
盛大な拍手に包まれる。

雫 「そういうとこだよ」

蓮一郎、拍手に紛れて雫の声が聞き取れない。

雫、蓮一郎の膝元、ペンギンのぬいぐるみをチラッと見て、

雫 「それ、捨てていいよ」

蓮一郎、呆然としている。

2. 「メモリユース」・外（昼）

路面店。だだっ広い駐車場には軽自動車が1台だけ
停まっている。

ガラス張りの窓から店内が見える。

3. 「メモリユース」・店内（昼）

幅広い店内。大型家具や骨とう品などから、ゲーム
やトレーディングカードまで、多種多様なものが陳
列されている。

蓮一郎、売り場の一角、陳列されているネジをじつ
と見つめている。その手には何かが入った袋。

価格は、152万円。

古淵の声「何か、お探ですか」

蓮一郎、ビクツとして振り向く。

店主の古淵辰之助（64）、穏やかな笑みを浮かべ

て立っている。蓮一郎に近づき、

古淵 「それ、高いと思ったでしょ」

1本152万円のネジ。

蓮一郎「はあ……」

古淵 「いやね、150万で買い取っちゃったんですよ」

蓮一郎「ネジ1本を？」

古淵 「ちゃったって、嫌々みたいに言いましたけど、嫌々では
ないですよ、全然」

蓮一郎、袋をきゅっと握る。

古淵、袋を一瞥（いちべつ）、

古淵 「思い出の値段ですからね」

蓮一郎 「あの、失礼ですが……」

古淵 「失敬。店主の古淵です。思い出査定をご所望で？」

× × ×

買い取り受付スペースで、蓮一郎は古淵と相對している。

ペンギンのぬいぐるみが机に置かれている。

古淵 「別れて1週間ですか」

蓮一郎 「……売れますかね？」

古淵、手袋をはめる。

古淵 「売りたいんですね」

蓮一郎、何も答えられない。

古淵、ぬいぐるみを丁寧に触る。

古淵 「ちなみに、持っていて犯罪になるもの以外、うちではすべて買い取っています」

蓮一郎 「……ネジ1本、売ってますもんね」

古淵 「誰かにとって不要となったものは、またある誰かにとっては必要なものになるんです」

蓮一郎、じっとぬいぐるみを見つめて、

蓮一郎 「不要……」

古淵、蓮一郎を窺い見て、

古淵 「聴かせてもらえますか、あなたの思い出を」

4. 「メモリユース」・外（夕）

雨が降っている。

ガラス張りの窓越し、蓮一郎は古淵に話している。

5. 「メモリユース」・店内（夕）

蓮一郎、お茶を啜り、

蓮一郎 「すいません、俺らの過去なんて、どうでもいいですよね」

古淵、ペンギンのぬいぐるみを撫でている。

古淵 「査定には必要なことです」

ぬいぐるみを机に置く。

そして席を立ち、奥に消える。

ひとりになった蓮一郎、背もたれに背を預け、宙を仰ぐ。

するとひとりでに涙が流れる。

蓮一郎、きつと拭うと、ペンギンのぬいぐるみと目が合う。

蓮一郎「……」

蓮一郎、ぎこちなく笑う。

古淵、札束を載せたトレイを持って戻ってくる。

古淵「お待たせいたしました」

蓮一郎、姿勢を正し、深呼吸。

古淵「査定結果をお伝えします」

トレイを蓮一郎に差し出し、

古淵「207万円です」

蓮一郎「え……」

古淵「あなたの思い出にはそれだけの価値がある」

蓮一郎、震える声で、

蓮一郎「えっと、すみません……1000円で買いました」

古淵、ふつと笑みをこぼし、

古淵「ペンギンの値段はそうでしょうね」

蓮一郎「……いいんですか？」

古淵「逆に、いいんですか？」

蓮一郎、じつとペンギンのぬいぐるみを見つめる。

蓮一郎「捨てなきゃとは思うんです、別れたんで。もう過去のことなんで」

古淵「わかります」

蓮一郎「わかりますか？」

古淵、ひとつ頷き、

古淵「私は、あなたの思い出を買い取り、誰かにとっての宝物にすることができます」

蓮一郎「……宝物」

古淵「ただそれは、あなたの宝物でない場合に限ります。あなたがまだ宝物だと思っているのなら、私は誰かに売ることできません」

蓮一郎、苦笑して、

蓮一郎「変な人ですね」

古淵「私が？」

蓮一郎「『売るのがやめとけ』っていう買い取り業者はいないと思います」

古淵、不意に切なそうな表情を浮かべて、

古淵「一度手放せば、簡単に戻ってくるわけじゃないですから」と、穏やかな笑みに戻り、

古淵「だから、本当に宝物でなくなったときに、売ればいいんです。焦ることはありません」

蓮一郎、ペンギンのぬいぐるみを手に取る。

6. 「メモリユース」・外（夕）

雨上がり。

電話の呼び出し音が鳴っている。

蓮一郎、軽自動車に寄りかかり、電話をかけている。
車の助手席に、ペンギンのぬいぐるみ。

電話がつながる。

蓮一郎「雫、ごめん急に」

電話越しに雫の声が聞こえる。

雫の声「うん、どうかした？」

蓮一郎「俺さ、やっぱり未練ある」

雫の声「蓮一郎……」

蓮一郎「わかってる。だけど情じゃない。俺は——」
雫、遮って、

雫の声「もう遅いよ……」

7. 「メモリユース」・店内（昼）

買い取り受付スペース。

雫は古淵から大金を受け取る。

雫「私って、嫌なやつですかね？」

机に、ペンギンのぬいぐるみ。

古淵「思い出を換金してるから？」

雫、ぎこちなく苦笑。

古淵、ふっと笑みをこぼす。

雫、席を立つ。

古淵 「あの」

雫、古淵を見つめる。しかし何も言わずに一礼だけして立ち去る。

古淵、ペンギンのぬいぐるみを手に取る。

愛でるように、優しく撫でる。

おわり